

障害幼児の療育や統合保育におけるムーブメント教育・療法活用の可能性の検討

—保育士・指導員へのアンケート調査から—

阿部 美穂子¹⁾

障害のある幼児の療育、及び統合保育におけるムーブメント教育・療法活用の可能性を探ることを目的に、保育・療育に携わる保育士・指導員らに対し、ムーブメント教育・療法の体験研修を実施し、発達支援プログラムとしてどのような効果を期待できるか、どのような形で療育や保育場面に導入できるかなどについて、アンケート調査を実施した。その結果、障害児通園施設で療育に携わる保育士や指導員らは、発達の促進に重点を置きつつ、活動の楽しさや子どもの実態への柔軟な対応が可能であることに着目していた。また、統合保育に携わる保育士らは、発達に気がかりのある子どもの社会性や情緒、活動参加意欲の問題に対応できる点に着目し、特に本人だけでなく、周りの子どもに及ぼす効果や年齢等を問わず実施できる点を取り上げていた。このことから、ムーブメント教育・療法が、個に応じた多様な取り組みが求められる保育・療育の実践に生かすことができ、特に障害のある子どもや発達に気がかりがある子どもを含む集団保育活動プログラムとしても、導入できる可能性が示された。

Key words ; ムーブメント教育・療法 障害児保育 統合保育 発達支援 療育

I. 目的

障害のある幼児への発達支援については、これまでに各種入所施設や通園施設などの専門機関で療育を行う体制が作られてきている。加えて、1974（昭和49）年の「障害児保育事業実施要綱」の策定以来、地域の保育所で障害児を受け入れる統合保育の実践が積み重ねられてきている。しかしながら、統合保育導入から30年を経た現在も、統合保育は保育士にとって不全感をもたらすものであり（河内・福澤・濱田、2006）、多くの保育士や指導員らは障害のある子どもへの保育プログラムに不安を抱えている（中嶋、2002、山本・山根、2006）のも現実である。このように、障害児の保育は、保育に携わる者にとって今日的な重要課題の一つとなっている。

2008年3月に改訂された幼稚園教育要領では、障害のある幼児の指導にあたり、集団生活の中で全体的な発達を促していくことや、障害のある幼児とそうでない幼児とが活動を共にする機会を積極的に設けるよう配慮することが示されている。また、同時期に改訂された保育所保育指針においても、障害

のある子どもの保育については、一人一人の子どもの発達過程や障害の状態を把握し、適切な環境の下で、障害のある子どもが他の子どもとの生活を通して共に成長できるよう、指導計画の中に位置付けることが示されている。このことから、障害のある幼児の発達支援については、従来の専門機関による個別的な治療訓練だけでなく、日常的な保育において、障害のある幼児を含めたすべての子どもの発達を支援できる活動をどのように創出するかという、新しい保育・療育内容及び方法の開発が求められてきているといえる。特に、これまでの統合保育においては、通常の保育活動の中で、物理的な環境整備や人的配置により、いかに障害児への個別支援を適切に行うかに関心があり、障害のある子どももいない子どもも共に楽しみ、発達を促進する集団保育のプログラムを開発する研究については、十分なされていない。

ところで、障害のある幼児の療育方法の一つにムーブメント教育・療法がある。ムーブメント教育・療法は、多様な遊具や音楽などの環境を活用して体を動かす遊びを中核とした、子どもの健康と幸

1) 富山大学人間発達科学部

福感の達成をねらいとする療育方法である（小林，2007；Frostig，1970）。小林（1985）は、人間の運動発達が認知機能や情緒機能など他の諸機能と強い結びつきがあると指摘している。子どもの発達にとって必要な身体運動経験を目的的にプログラムして行うことにより、身体・運動面での発達だけでなく、知的発達や情緒面の発達を促進する。このムーブメント教育・療法による療育プログラムを定期的を実施することによって、MEPAあるいはMEPA-R（Movement Education and Therapy Program Assessment-Revised、小林，2005）における評価で、障害のある幼児の発達における伸長が確認できた事例が報告されている（柳沼・小林，1993、末光・橋本・土岐・森永・中島，1996、田村・小林，2006）。しかしながら、これまでの研究では少数の対象児に時間を設定してプログラムを実施した例がほとんどであり、ムーブメント教育・療法を日常的な保育活動の中にどのように取り入れるかについては、十分検討されてきていない。ムーブメント活動は、トランポリンやキャスターボードのように大型の遊具や、ロープやスカーフ、フープのように小型の遊具、さらには身近な素材を用いて、子どもが楽しみながら運動できるようにプログラムされており、特に、統合保育の面からも、障害のある子ども、そうでない子どもも共に参加し、発達を促進することができる集団保育のプログラムとして活用できる可能性が高いと考えられる。

そこで本研究では、保育・療育に携わる保育士らに対し研修を実施し、実際にムーブメント教育・療法を体験してもらい、発達支援プログラムとしてどのような効果を期待できるか、どのような形で療育や保育場面に導入できるかなどについて、アンケート調査を実施する。それにより、障害のある幼児の療育、及び統合保育におけるムーブメント教育・療法活用の可能性を探ることを目的とする。

II. 方法

1. 対象

- A：T県内の障害児通園施設4か所の指導者37人
- B：T県内の保育所20か所の指導者85人

2. 手続き

保育士らに対し、筆者が約2時間のムーブメント教育・療法に関する理論・実技研修を1回行い、そ

の後アンケート調査を実施した。研修は、A、Bいずれに対しても、資質向上を目的として企画された研修の一つとして実施した。実施時期はAを対象とした場合が2008年7月、Bを対象とした場合が同10月である。

研修内容は、まず資料に基づきムーブメント教育・療法における発達観、支援の考え方、発達段階別プログラムの実際、実践のコツの4つについて約1時間程度の講義を行い、その後1時間程度の実技演習を行う。実技演習の内容は、身体のタッピング、ロープをつかった活動、風呂敷（スカーフ）や新聞紙を使った活動で、詳細は表1の通りである。

表1 実技演習で取り入れた活動の例

項目	内 容
身体の高 タッピング	<ul style="list-style-type: none"> ・歌に合わせて身体のいろいろな部分をタッピングする。 ・参加者が順に身体部位を指定し、全員が指定された部位をタッピングする。 ・各身体部位の特徴や動きをクイズ形式で発表し、答えとなる身体部位を全員でタッピングする。 など
ロープをつ かった活動	<ul style="list-style-type: none"> ・赤、黄、青、緑の色のロープをつないで円を作り、引っ張り合いをしたり、左右に回したり、上下に動かしたりする。 ・ロープをもって前後左右に移動する。移動スピードを変える。 ・ロープの色を指定して、指定されたロープをもっている人が場所交代をする。 ・ロープで、さまざまな道をつくり、落ちないようにたどる。一人で、ほかの人と手をつないで。 ・高さをいろいろに変えてロープを張り、くぐったりまたいだりする。 など
風呂敷（ス カーフ）や 新聞紙を 使った活動	<ul style="list-style-type: none"> ・風呂敷（スカーフ）や新聞紙で、さまざまな身体部位をこする。隠す。 ・一人を風呂敷（スカーフ）に乗せ、複数の人で、そのように引く。 ・新聞紙に足を乗せ、滑らせながら歩く。 ・風呂敷（スカーフ）を丸めて、高くとばす。手で受け取る。手以外の身体各部で受け取る。 ・二人組になって音楽に合わせて動き、止まったら、ほかの組の人に風呂敷（スカーフ）をかける。 など

アンケートは、研修終了後その場で記入を求めた。記入にかかった時間は約10分程度である。アンケート内容は、①職種、②指導経験年数、③以前からムーブメント教育・療法について知っていたか（はい・いいえ）、④ムーブメント教育・療法が障害のある幼児及び発達に気がかりがある幼児の保育・療育に有効だと考える点（自由記述）、⑤ムーブメント教

育・療法を自分の保育・療育に取り入れたい程度（取り入れたくない、あまり取り入れたくない、どちらとも言えない、できれば取り入れたい、ぜひ取り入れたいの5件法）、⑥その理由（自由記述）、⑦もし取り入れたいならその場面（自由記述）である。

III. 結果

結果処理にあたって、自由記述項目については、筆者と特別支援教育を学ぶ学生の計5名がキーワードを選び出し、協議してカテゴリライズし、整理した。また、得られたデータは単純集計により分析した。

1. 回収率

回収率は、A、Bともに100%であった。

2. 回答者の職種構成

A：保育士30人、作業療法士1人、その他の指導員6人（計37人）
B：保育士85人

3. 回答者の指導経験年数構成

経験年数10年ごとに集計したところ、以下のよう
な構成となった。
A：～10年（31人）、～20年（2人）、～30年（1人）、～40年（3人） 計37人
B：～10年（33人）、～20年（16人）、～30年（18人）、～40年（18人） 計85人

4. 以前からムーブメント教育・療法について知っていたか

以前からムーブメント教育・療法について知っていた者は、名前を聞いたことがある程度の者を含め、Aでは32人（86.5%）、Bでは45人（52.9%）であった。また、すでに自分の実践に取り入れている者は、Aが11名（29.7%）、Bが2名（2.4%）であった。

5. ムーブメント教育・療法が障害のある幼児及び発達に気がかりがある幼児の保育・療育に有効な点

Aの回答総数は85で、11のカテゴリーに分けられた。Aにおける各カテゴリーと回答数を表2に、全回答数における各カテゴリーの回答数の割合を図1に示す。また、Bの回答総数は115で、同じく11のカテゴリーに分けられた。Bの各カテゴリーと回答数を表2に、全回答数における各カテゴリー

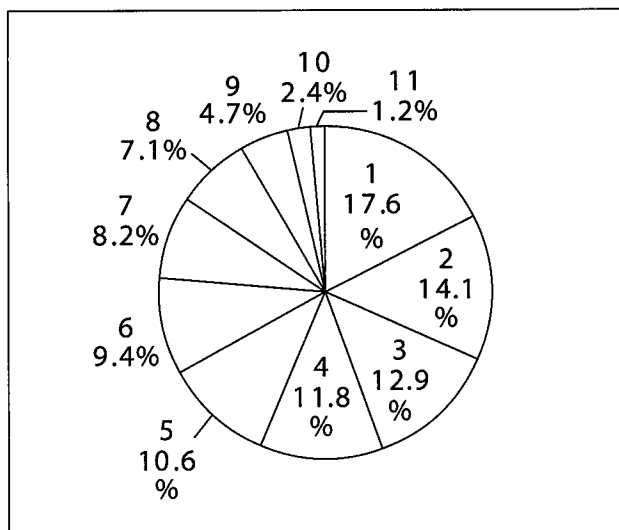
の回答数の割合を図2に示す。A、Bそれぞれのカテゴリーは、同じものが10種類、異なるものが1種類であり、異なるカテゴリーとして、Aでは、「いろいろな体験を増やせる（回答数4、全回答数の4.7%）」、Bでは、「周囲の子どもの本人へのかかわりを育てられる（回答数3、全回答数の2.6%）」が挙げられた。

Aの上位3つのカテゴリーは、①遊びを通じて行うため分かりやすく、楽しんでもできる（回答数15、全回答数の17.6%）、②体を動かすことで発達の遅れている面や言葉などについて発達を促進できる（回答数12、全回答数の14.1%）、③子どもの興味関心や発達の過程、状態に応じてプログラムできる（回答数11、全回答数の12.9%）の順であった。

Bの上位3つのカテゴリーは、①協力性や協調性・他者意識・ルールを守るなど、社会性を育てられる（回答数31、全回答数の27.0%）、②子どもの意欲や自信、幸福感、達成感など、心の発達を促すことができる（回答数21、全回答数の18.3%）、③遊びを通じて行うため分かりやすく、楽しんでもできる（回答数15、全回答数の13.0%）、体を動かすことで遅れている部分や言葉などの発達を促すことができる（回答数15、全回答数の13.0%）の順であった。

表2 ムーブメント教育・療法が障害のある幼児及び発達に気がかりがある幼児の保育・療育に有効な点
(数値は回答数)

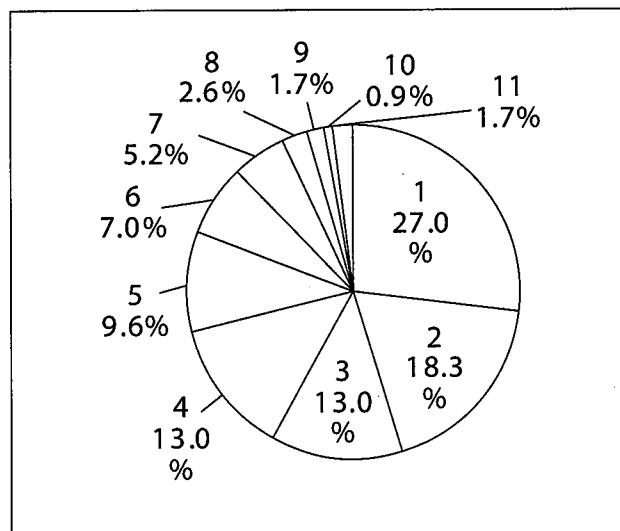
カテゴリー	A	B
・遊びを通じてするためわかりやすく、楽しんでもできる	15	15
・体を動かすことで遅れている部分や言葉などの発達を促すことができる	12	15
・子どもの興味関心や、発達の状態に合わせてプログラムできる	11	6
・身近な環境や様々な遊具を活用できる	10	1
・子どもの意欲や自信・幸福感・達成感など心の発達を促すことができる	9	21
・協力性や協調性・他者意識・ルールを守るなど、社会性を育てられる	8	31
・身体感覚や身体概念・身体の使い方など、体の機能を知ることができる	7	11
・様々な感覚を活用できる	6	8
・いろいろな体験を増やせる	4	0
・音楽を聞きながら体を動かせる	2	2
・周囲の子どもの本人へのかかわりを育てられる	0	3
・その他	1	2
計	85	115



凡例

- 1：遊びを通じてするため分かりやすく、楽しんでもできる
- 2：体を動かすことで遅れている部分や言葉などの発達を促すことができる
- 3：子どもの興味関心や、発達の状態に合わせてプログラムできる
- 4：身近な環境や様々な遊具を活用できる
- 5：子どもの意欲や自信・幸福感・達成感など心の発達を促すことができる
- 6：協力性や協調性・他者意識・ルールを守るなど、社会性を育てられる
- 7：身体感覚や身体概念・身体の使い方など、体の機能を知ることができる
- 8：様々な感覚を活用できる
- 9：いろいろな経験を増やせる
- 10：音楽を聞きながら体を動かせる
- 11：その他

図1 Aにおいて、ムーブメント教育・療法が障害のある幼児及び発達に気がある幼児の保育・療育に有効な点について、各カテゴリーの回答数が全回答数に占める割合



凡例

- 1：協力性や協調性・他者意識・ルールを守るなど、社会性を育てられる
- 2：子どもの意欲や自信・幸福感・達成感など心の発達を促すことができる
- 3：遊びを通じてするため分かりやすく、楽しんでもできる
- 4：体を動かすことで遅れている部分や言葉などの発達を促すことができる
- 5：身体感覚や身体概念・身体の使い方など、体の機能を知ることができる
- 6：様々な感覚を活用できる
- 7：子どもの興味関心や、発達の状態に合わせてプログラムできる
- 8：周囲の子どもの本人へのかかわりを育てられる
- 9：音楽を聞きながら体を動かせる
- 10：身近な環境や様々な遊具を活用できる
- 11：その他

図2 Bにおいて、ムーブメント教育・療法が障害のある幼児及び発達に気がある幼児の保育・療育に有効な点について、各カテゴリーの回答数が全回答数に占める割合

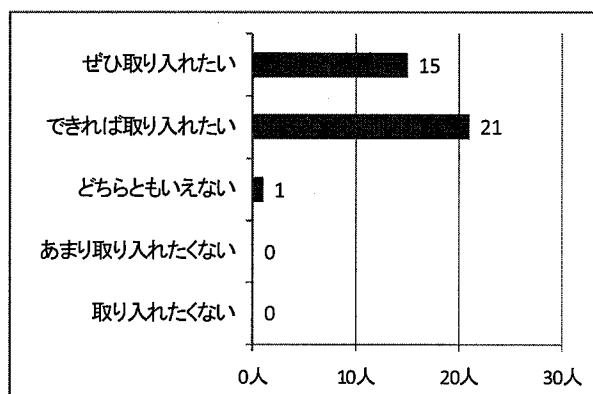


図3 ムーブメント教育・療法を自分の保育・療育に取り入れたい程度：A

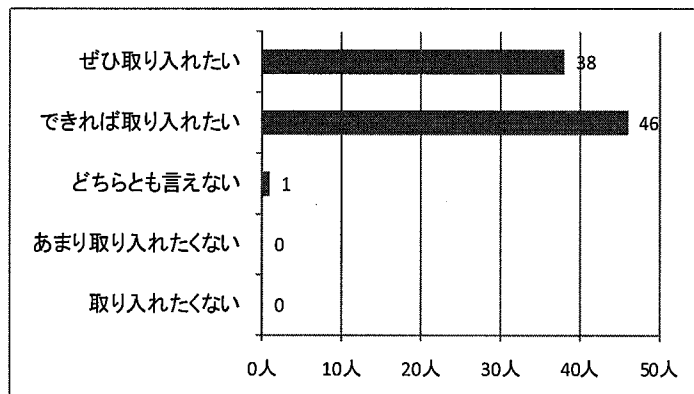


図4 ムーブメント教育・療法を自分の保育・療育に取り入れたい程度：B

表3 ムーブメント教育・療法を自分の保育・療育に取り入れたい程度を選んだ理由：A

カテゴリー	数	%
①子どもが取り組む活動の特質に関する事項	23	53.5
i 集団療育の中で行うことができ、人とのかわりが持てる	11	25.6
ii 楽しく体を動かしてできる	10	23.3
iii 親子で楽しくできる	2	4.7
②子どもの能力や興味関心などの実態に関する事項	10	23.3
i 柔軟に子どもにあったステップを踏める	4	9.3
ii 子どもの興味関心に基づいて実施できる	4	9.3
iii 子どもの成長や発達の段階を実感できる	1	2.3
iv 遊べない子どもを遊びにつなげられる	1	2.3
③保育士・指導員の取り組み方に関する事項	10	23.3
i 療育の考え方に共感でき、実践に生かしたい	3	7.0
ii 身近な素材を使える	2	4.7
iii やり方が決まっていないので、自由にできる	2	4.7
iv 保育士・指導員も楽しめる	2	4.7
v 個別にかかわるとき、どうして良いか困る	1	2.3

表4 ムーブメント教育・療法を自分の保育・療育に取り入れたい程度を選んだ理由：B

カテゴリー	数	%
①子どもが取り組む活動の特質に関する事項	35	30.7
i 楽しく体を動かしてできる	23	20.2
ii 分かりやすく無理がない	9	7.9
iii 親子で楽しくできる	3	2.6
②子どもの能力や興味関心などの実態に関する事項	65	57.0
i 自信・社会性・情緒面での力を伸ばすことができる	27	23.7
ii どんな実態の子どもにも取り組める	20	17.5
iii 発達全般を伸ばすことができる	16	14.0
iv 子どもの興味関心に基づいて実施できる	2	1.8
③保育士・指導員の取り組み方に関する事項	14	12.3
i 身近な素材を使える	9	7.9
ii 保育士・指導員も楽しめる	5	4.4

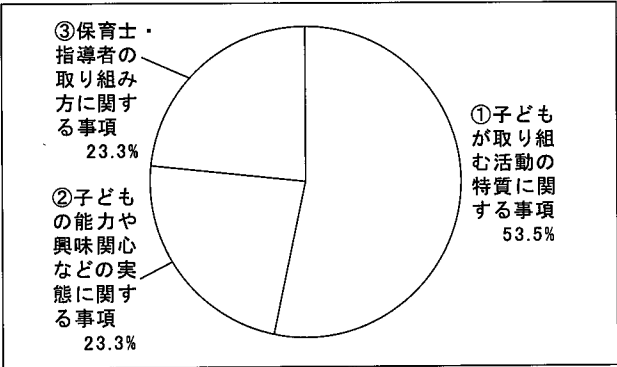


図5 ムーブメント教育・療法を自分の保育・療育に取り入れたい程度を選択理由の上位カテゴリーの割合：A

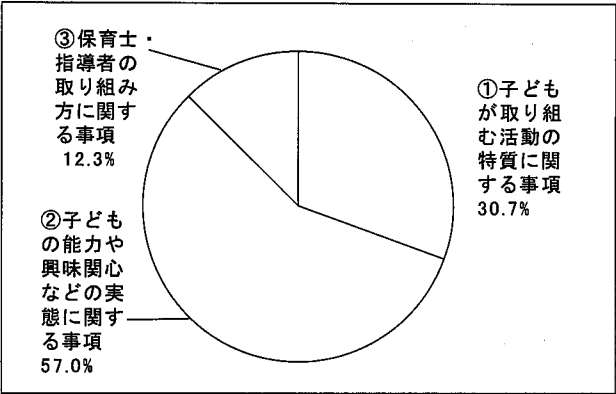


図6 ムーブメント教育・療法を自分の保育・療育に取り入れたい程度を選択理由の上位カテゴリーの割合：B

6. ムーブメント教育・療法を自分の保育・療育に取り入れたい程度とその理由

ムーブメント教育・療法を自分の保育・療育に取り入れたい程度については、Aでは「ぜひ取り入れたい（すでに取り入れている者を含む）」15人（40.5%）、「できれば取り入れたい」21人（56.8%）、「どちらとも言えない」1人（2.7%）であった（図3）。Bでは、「ぜひ取り入れたい（すでに取り入れている者を含む）」38人（44.7%）、「できれば取り入れたい」46人（54.1%）、「どちらとも言えない」1人（1.2%）であった（図4）。また、A、Bとも、「あまり取り入れたくない」、「取り入れたくない」を選択した者はいなかった。

その回答を選んだ理由として、Aは43、Bは114の記述があった。記述されていた内容を分類した上位カテゴリーと下位カテゴリー、及び回答数とそれぞれが回答総数に占める割合を表3、表4に示す。また、その上位カテゴリーが回答に占める割合を図5、図6に示す。上位カテゴリーは、A、Bとも、①子どもが取り組む活動の特質に関する事項、②子どもの能力や興味関心などの実態に関する事項、③保育士・指導員の取り組み方に関する事項の3つに整理された。

①子どもが取り組む活動の特質に関する事項とは、活動を展開する際の具体的なイメージをふまえて、ムーブメント教育・療法の活動がもつ特質について述べている回答のグループである。下位カテゴリーとして、Aでは、i 集団療育の中で行うことができ人とのかわりが持てる、ii 楽しく体を動かしてできる、iii 親子で楽しくできるの3つ、Bでは、i 楽しく体を動かしてできる、ii 分かりやすく無理

がない、Ⅲ親子で楽しくできるが含まれた。②子どもの能力や興味関心などの実態に関する事項とは、ムーブメント教育・療法による活動に参加する子どもの実態や活動を通して得られるであろう子どもの変化など、子どもに視点をおいている回答のグループである。下位カテゴリーとして、Aでは、i 柔軟に子どもにあったステップを踏める、ii 子どもの興味・関心に基づいて実施できる、Ⅲ子どもの成長や発達の段階を実感できる、iv 遊べない子どもを遊びにつなげられるの4つ、Bでは、i 自信・社会性・情緒面での力を伸ばすことができる、ii どんな実態の子どもにも取り組める、Ⅲ発達全般を伸ばすことができる、iv 子どもの興味・関心に基づいて実施できるの4つが含まれた。③保育士・指導員の取り組み方に関する事項とは、保育士や指導員が実際にムーブメント教育・療法による活動を展開する際に考えたり、感じたりする事項に関する回答である。下位カテゴリーとして、Aでは、i 療育の考え方に共感でき、実践に生かしたい、ii 身近な素材を使える、Ⅲやり方が決まっていないので、自由にできる、iv 保育士・指導員も楽しめる、v 個別にかかわるときどうして良いか困るの5つ、Bでは、i 身近な素材を使える、ii 保育士・指導員も楽しめるの2つが含まれた。Aのvは、「どちらともいえない」を選んだ回答者の理由である。

上位カテゴリーについて、Aでは、①子どもが取り組む活動の特質に関する事項(53.5%)が最も多く、②子どもの能力や興味関心などの実態に関する事項(23.3%)、③保育士・指導員の取り組み方に関する事項(23.3%)は同数であった。Bでは、②子どもの能力や興味関心などの実態に関する事項(57.0%)が最も多く、続いて、①子どもが取り組む活動の特質に関する事項(30.7%)、③保育士・指導員の取り組み方に関する事項(12.3%)であった。

下位カテゴリーのうち、A、Bそれぞれにおいて20%以上を占めたのは、Aが「集団療育の中で行うことができ、人とのかわりかかわりが持てる(25.6%)」「楽しく体を動かしてできる(23.3%)」、Bが、「自信・社会性・情緒面での力を伸ばすことができる(23.7%)」「楽しく体を動かしてできる(20.2%)」と、いずれも人とのかわりかかわりや社会性に関する事項と運動を通して行う活動である点が挙げられている。また、ほかにもA、B両方に共通したカテゴリーとして、「親子で楽しく活動できる」、「子どもの興

味・関心に基づいて実施できる」、「身近な素材を使える」、「保育士・指導員も楽しめる」が挙げられた。一方、Aにのみ挙げられたカテゴリーとしては、子どもにあったステップを組めることや指導者が自由に展開できることなど、ムーブメント教育・療法の柔軟性に着目したものがあった。Bにのみ挙げられたカテゴリーとしては、分かりやすく無理のない活動であることや、どんな実態の子どもにもできるなどのムーブメント教育・療法の汎用性に着目したものがあった。

7. ムーブメント教育・療法を自分の保育・療育に取り入れたい場面

ムーブメント教育・療法を自分の保育・療育に取り入れたい場面について、A、Bそれぞれの回答内容と回答数を表5、表6に、またそれぞれの項目が回答全体に占める割合を図7、図8に示す。Aの回答総数は38、Bの回答総数は61であった。回答内容として、A、B両方で挙げられたものは、「集団活動」、「親子活動」、「毎日の活動」、「遊び」であった。Aのみに挙げられた活動としては、「療育活動」、「少人数の活動」、「デイサービス」があった。Bのみに挙げられた活動としては、「課題への導入時や離脱した子どもの誘導時」、「異年齢活動」があった。また、Aで最も多く回答があったのが「親子活動」(回答数13、34.2%)、Bで最も多く回答があったのが「集団活動」(回答数20、32.8%)であった。

表5 ムーブメント教育・療法を自分の保育・療育に取り入れたい場面：A

カテゴリー	数	%
① 親子活動	13	34.2
② 集団活動	7	18.4
③ 療育活動	6	15.8
④ 毎日の活動	4	10.5
⑤ 少人数の活動	3	7.9
⑥ 遊びの中で	3	7.9
⑦ デイサービス	2	5.3

表6 ムーブメント教育・療法を自分の保育・療育に取り入れたい場面：B

カテゴリー	数	%
① 集団活動	20	32.8
② 親子活動	10	16.4
③ 毎日の活動	10	16.4
④ 遊びの中で	10	16.4
⑤ 課題への導入時や離脱した子どもの誘導時	6	10.0
⑥ 異年齢活動	5	8.2

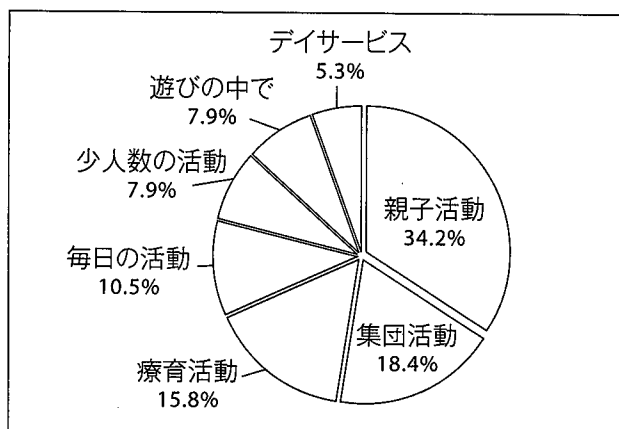


図7 ムーブメント教育・療法を自分の保育・療育に取れたい場面：A

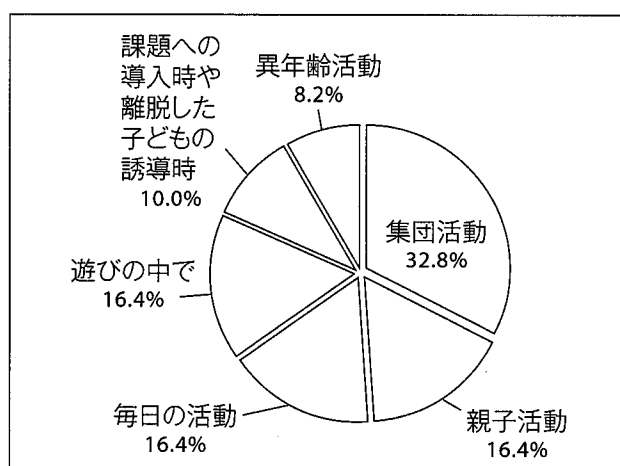


図8 ムーブメント教育・療法を自分の保育・療育に取れたい場面：B

IV. 考察

アンケート結果では、障害のある幼児の療育や統合保育に関わる保育士・指導員らは、大多数が何らかの形で自らの実践に取り入れて、障害のある幼児及び発達に気がかりがある幼児の保育・療育に活用したいと考えている。この意欲の高さについては、今回のアンケートを実施した機会が、ムーブメント教育・療法をテーマとした資質向上研修であったことから、ある意味、当然の結果と考えられる。むしろ、このように関心の高い保育士らであるため、ムーブメント教育・療法に関して、より多様な側面から、その活用の可能性を分析することができたものと考えられる。そこで、アンケートの記述に基づき、以下にその活用の視点を整理する。

1. 発達支援の方法として活用

ムーブメント教育・療法が障害のある幼児及び発達に気がかりがある幼児の保育・療育に有効な点

(以下、有効点)としての回答のカテゴリーで、「体を動かすことで遅れている部分や言葉などの発達を促すことができる」(A：14.1%、B：13.0%)、「子どもの意欲や自信・幸福感・達成感など心の発達を促すことができる」(A：10.6%、B：18.3%)、「協力性や協調性・他者意識・ルールを守るなど、社会性を育てられる」(A：9.4%、B：27.0%)、「身体感覚や身体概念・身体の使い方など、体の機能を知ることができる」(A：8.2%、B：9.6%)など、発達の諸機能を伸長するための方法として、ムーブメント教育・療法に期待する回答が複数あった。さらに、ムーブメント教育・療法を自分の保育・療育に取り入れたい程度を選んだ理由(以下、取り入れ理由)に「自信・社会性・情緒面での力を伸ばすことができる」(B：23.7%)、「発達全般を伸ばすことができる」(B：14.0%)のように、発達支援の視点から自らの保育に取り入れたいという回答が複数あった。このように、A、Bともに、発達全般にわたる支援にムーブメント教育・療法を活用できるととらえている。

中でも、Bの回答では、図2、表4に見るように、社会性面、自信・意欲、情緒面での発達を促進することへの期待が上位を占めている。このことは、統合保育に携わる保育士の意識として、障害のある幼児や発達に気がかりのある幼児が、他の子どもとかわることが難しかったり、活動を共有することが難しかったりする発達課題に対応できることを念頭に置いていると考えられる。さらには、有効点の回答の中に、「周囲の子どもの本人へのかかわりを育てられる」(2.6%)が複数あり、単に、障害や発達に気がかりのある子どもだけでなく、周りの子どもの社会性スキルをともに育てる集団保育活動として、統合保育ならではの活用の視点が示唆されている。

2. 参加を高める活動として活用

障害のある幼児及び発達に気がかりがある幼児の中には、場合によっては集団活動の場から逸脱し、参加が難しい者もある。この点に関連して、有効点の回答の中に、「遊びを通じてするため分かりやすく、楽しんでできる」(A：17.6%、B：13.0%)が挙げられており、Aでは最も多数を占め、Bでも3番目に回答数の多いカテゴリーであった。また、取り入れ理由の回答においても、「楽しく体を動か

してできる」(A:23.3%、B:20.2%)がそれぞれ2番目に多い回答数を占め、Bではさらに、「どんな実態の子どもでも取り組める」(17.5%)が3番目に多い回答数となり、他に、「分かりやすく無理がない」(7.9%)というカテゴリーも挙げられた。このように、子どもにとっての分かりやすさや楽しさ、「できる」手応えに着目し、障害のある幼児及び発達に気がかりがある幼児が参加しやすい集団活動として、ムーブメント教育・療法を保育に取り入れる活用の視点が示唆された。

3. 子どもの実態に応じた活動として活用

子どもの実態に応じた活動を組み立てる場合の視点としては、一つは子どもが現在持っている能力を生かす視点、もう一つは子どもの興味関心を生かす視点の2つが考えられる。有効点の回答においては、これら2つの視点について、「子どもの興味関心や、発達の状態に合わせてプログラムできる」の回答が、Aで12.9%、Bで5.2%挙げられている。特に、Aでは3番目に多いカテゴリーとなった。また、取り入れ理由の回答においても、「子どもの興味関心に基づいて実施できる」が、Aで9.3%、Bで1.8%あり、また、Aでは、「柔軟に子どもにあったステップを踏める」が、9.3%挙げられている。特に、Aの保育士・指導員らは、多様な障害のある子どもの療育に携わっている。そのため、発達や障害の状況が大きく異なる子ども達や興味関心に偏りのある子ども達に対し、個に応じた活動内容を設定するだけでなく、さらにそれらの子ども達が一緒に行うことができる活動を設定しなければならない場合もある。よって、子どもの興味関心や、発達の状態に合わせて柔軟にプログラムできるというムーブメント教育・療法の特質は、Bの保育士らに比べ、より関心の高い活用の視点となっていると思われる。

4. 保育士・指導員にとって、実施しやすい活動として活用

有効な方法と分かっているにもかかわらず、実施する保育士や指導員がやりにくさを感じる活動は実施や継続が困難となる。よって、実施しやすさは、活用の重要な視点といえる。アンケートからは、この保育士・指導員にとっての実施しやすさについて、複数の要素があることが示唆されている。

一つは、活動に用いる素材の準備しやすさである。

アンケートでは、取り入れ理由において、「身近な素材を使える」という回答がAで4.7%、Bでは7.9%挙げられている。ムーブメント活動用に開発された遊具だけでなく、工夫次第でさまざまな素材をプログラムに取り入れることができる点に着目したものと思われる。

もう一つは、子どもに多様に働きかけられることである。有効点の回答に挙げられた「さまざまな感覚を活用できる」(A:7.1%、B:7.0%)ことや、Aの取り入れ理由に挙げられた「やり方が決まっていないので、自由にできる」(4.7%)のように、プログラムを実施する側にとっての活動展開の多様性がムーブメント教育・療法を活用する視点の一つとなっていると思われる。

さらなる要素は、保育士・指導員自身が楽しめることである。これについて、取り入れ理由のAで4.7%、Bで4.4%の回答があった。本来子どものために行う活動ではあるが、それを展開することが子どもだけでなく、保育士や指導員にとっても楽しみや喜びと感じられることで、継続的な取り組みとその改善への力となる。子どもも支援者も楽しめる活動であることは、実施しやすさを示す重要な特徴であると言える。

5. 多様な保育活動場面に導入できる活動として活用

表5、表6、及び図7、図8に見るように、A、Bの保育士・指導員らは複数の場面で、ムーブメント教育・療法を導入したいと考えている。A、B、いずれも、「集団活動」、「親子活動」、「毎日の活動」、「遊び」を挙げていることから、一つは、保育士や指導員がプログラムを展開する集団での設定保育として、もう一つは、日常的に行われる自由な活動や遊びとして、活用する視点が見られる。また、「親子活動」(A:34.7%、B:16.4%)が挙げられていることは、子どもだけでなく、一緒に活動する大人自身も楽しめるムーブメント活動の特質をとらえて、親参加型の活動にふさわしいととらえたからであろう。また、集団で行う親子活動では、障害のある幼児や発達に気がかりがある幼児が参加しやすい活動であることが重要なポイントであり、その点からも導入しやすいと判断したと思われる。

Aのみに「療育活動」(15.8%)が挙げられているのは、先に述べた発達支援の方法としての活用の

視点が協調されたからであると考えられる。併せて A では、「少人数の活動」(7.9%)、「デイサービス」(5.3%) など、障害のある幼児の支援に携わる保育士・指導員ならでは、集団の規模や活動の場面を問わない多様な活動場面への活用が提案されている。

B のみに挙げられた活動としては、「課題への導入時や離脱した子どもの誘導時」(10.0%)、「異年齢活動」(8.2%) があった。統合保育において、障害のある幼児や発達に気がかりがある幼児がスムーズに集団活動に参加することは、保育士が常に配慮する事項の一つであろう。ムーブメント活動のもつ分かりやすさや楽しさ等、子どもの参加を高める特質を生かして、活動への導入や誘導場面に活用することは、障害のある幼児や発達に気がかりがある幼児のためだけでなく、他の幼児にとっても活動への集中を高めるために役立つものであり、統合保育におけるムーブメント教育・療法活用の有効な視点といえる。また、異年齢活動は、参加する幼児の発達の状態が大きく異なる活動であるが、同様にムーブメント活動の分かりやすさや展開の柔軟性などを活用できる保育場面として、挙げられたものと考えられる。

V. まとめ

以上、障害のある幼児の療育、及び統合保育に携わる保育士・指導員らが、ムーブメント教育・療法についてどのような効果を期待し、それをどのように、日々の保育・療育活動に活用しようと考えているかについて、検討してきた。

障害児通園施設で療育に携わる保育士や指導員らは、発達の促進に重点を置きつつ、ムーブメント教育・療法によって、活動が子どもにとって楽しいものとなること、対象児の障害の状態や興味関心に応じて、柔軟に支援できる点を強調している。一方、地域の保育所等で統合保育に携わる保育士らは、発達に気がかりのある子どもの保育を進める上で大きな課題である、他児とのかかわりや情緒の安定やコントロール、活動参加意欲の問題に対応できる点に着目している。特に周りの子どもに及ぼす効果や、子どもの年齢等を問わず実施できる点を取り上げているのも、統合保育に取り組む保育士ならではの課題意識と言える。

また、障害のある幼児のためだけの活動としての

視点だけでなく、障害のない子どもやその保護者を含めた多様な活動形態で導入できる点や、指導する側にとっても楽しめる活動である点が示されたことは、さらなる活用の可能性を広げるものといえる。

このように、保育士・指導員らの視点から、ムーブメント教育・療法が、個に応じた多様な取り組みが求められる保育・療育の実践に生かすことができ、特に障害のある子どもや発達に気がかりがある子どもを含む集団での活動プログラムとしても、導入できる可能性が示された。今後は、その具体的プログラムについて、さらなる研究開発が必要である。(本研究は、平成20年度富山大学学長裁量経費を受けた研究の成果の一部である。)

文献

- 河内しのぶ・福澤雪子・濱田裕子(2006) 統合保育が保育士に与える影響：K市で統合保育を経験した保育士へのアンケート調査より。産業医科大学雑誌, 28 (3), 337-348.
- 小林芳文(1985) ムーブメント教育の実践―動きを通して発達を育てる 対象別指導事例集。学研。
- 小林芳文(2005) MEPA-R (ムーブメント教育プログラムアセスメント)。日本文化化学社。
- Marianne Frostig (1970) Movement Education-Theory and Practice. 小林芳文(訳)(2007) フロスティグのムーブメント教育・療法―理論と実践―。日本文化科学社。
- 中嶋理香(2002) 障害児統合保育現場での医療者支援。小児保健研究, 61 (1), 52-58.
- 末光 茂, 橋本 朋子, 土岐 淑子, 森永 幸子, 中島 洋子(1996) 自閉症児へのムーブメント指導の実践：MEPA による運動発達評価とプログラム作成。川崎医療福祉学会誌, 6 (1), 49-55.
- 田村 英子, 小林 芳文(2006) 聴覚運動連合を意図した音楽ムーブメントの活用--広汎性発達障害児の事例を通して。児童研究, 85, 57-67.
- 柳沼 麻木・小林 芳文(1993) 発達遅滞幼児のムーブメント教育：グループ指導によるアプローチ法 横浜国立大学教育紀要, 33, 227-240.
- 山本佳代子・山根正夫(2006) インクルーシブ保育実践における保育者の専門性に関する一考察―専門知識と技術の観点から―。山口県立大学社会福祉学部紀要, 12, 53-60.

